

# 大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行） 第37号 大阪市史料調査会（編集）

平成23年11月発行

〒550-0014 大阪市西区北堀江4-3-2  
大阪市立中央図書館内 Tel.06-6539-3333

## ●真田幸村と『プリンセス・トヨトミ』

映画化もされ話題になった万城目学さん原作の大阪を舞台とした小説『プリンセス・トヨトミ』。大阪城周辺や空堀通り商店街のほか、なじみ深い大阪の町並みが情景豊かに描かれ、豊臣家に関わる歴史、またそれにちなんだ名前の人物が登場するなど、大阪の歴史に詳しい人ならずとも思わずニヤリとしてしまう内容です。

さて、主人公の一人である中学生の真田大輔と彼の父の幸一は、物語の中で重要な役割を担っていますが、当然、そのモデルは、豊臣家のために命を懸けた真田幸村（幸村は後世の通称。本名は信繁）・大助父子でしょう。

歴史上の真田父子は、慶長19年（1614）11月の大坂冬の陣と、翌年5月の夏の陣で豊臣方として徳川勢を相手に奮戦したことで知られています。冬の陣において幸村は、大坂城で防備の手薄な東南側に築かれた砦（真田丸）に籠もり、続々と迫り来る徳川の大軍を砦ギリギリまで引き付けて鉄炮を撃ちかけるという戦法で撃退しました。現在、天王寺区にある真田山町という町名はその真田丸に由来しますが、本来それは真田山町の隣の餌差町にあったと考えられています。ちなみに真田山町の北の玉造本町にある三光神社の境内には、幸村が大坂城との連絡のために掘ったと伝承される「真田の抜け穴」が残されています。

冬の陣のあと徳川方との講和により大坂城の外堀を埋められてしまったため、夏の陣では、豊臣勢は籠城戦ができず野戦を余儀なくされました。茶臼山に布陣した幸村は、徳川軍の総大将である家康の本陣めがけて騎馬隊による突撃を敢行します。そして、三度まで家康の本隊に迫ったものの、家康を討ち取ることは叶わず戦死しました。天王寺区逢阪の安居神社は、幸村が最後をむかえた場所として伝えられています。

一方大助は、大坂冬・夏両陣を描いた軍記物の『大坂御陣覚書』（大阪市史史料第76輯）によると、出陣前に死を覚悟していた父幸村の、城に帰り秀頼の最後に御供せよとの遺言にしたがい、落城する大坂城中で16才という若さで自害したと記されています。こうして真田父子の戦いは幕を閉じたのです。



三光神社に立つ真田幸村像（作者は成瀬國晴氏）  
画面左下に見えるのが「真田の抜け穴」



昭和20年6月の空襲で折れた  
三光神社の北側の鳥居

幸村は、その死後に敵方からも「日本一の兵<sup>つわもの</sup>」と大坂の陣での奮戦ぶりを賞賛されていますが、普段のイメージはそれとは随分違っていたようです。冬の陣のとき幸村を初めて見た人は、のちにその様子を「小兵なる人」(=小柄な人)と表現しています。また、幸村は1600年(慶長5)の関ヶ原の戦いのあとから冬の陣の直前まで高野山の麓の九度山に配流<sup>はいりゅう</sup>されていましたが、そのころ郷里の信州にいる家臣のもとへ手紙と空の壺<sup>はち</sup>を送って、その壺に焼酎<sup>しょうちゅう</sup>を詰めて送り返してくれと頼んでいます。さらに、冬の陣と夏の陣の間に幸村が自分の姉<sup>ひね</sup>に送った手紙には、「めっきり歳をとってしまい病気がちで歯も抜けるし、髭にも黒い毛が少なくなってきた」と、ほやきにも似た感情がつづられています。こうしたことから、家康を追い詰めた猛々<sup>たけだす</sup>しさはまったく感じられません。しかし、その裏には豊臣家を守るために命を懸けるというなみなみならぬ決意と信念が宿っていたのです。そんな幸村の姿を思い浮かべながら『プリンセス・トヨトミ』を読んでみると、大いなる使命を胸に秘めたお好み焼き屋の店主・真田幸一と幸村とが重なって見え、また違ったおもしろさを味わうことができるかもしれません。(生駒 孝臣)

### ●高いは通天閣、通天閣こわい…

今も昔も大阪の“シンボルタワー”である通天閣<sup>つうてんかく</sup>。かつて数多くの流行歌をつくった西条八十<sup>さいじょうやそ</sup>は、その最後の大ヒット「王将」の中で「明日は東京へ出て行くからは、何が何でも勝たねばならぬ、空に灯がつく通天閣に、俺の闘志がまた燃える」とうたいました。「浪花の名棋士<sup>なみかたさんきし</sup>」阪田三吉が宿敵関根金次郎と東京築地倶楽部で対局したのは、大正2年(1913)4月6日。「銀が泣いている」は今でも有名なエピソードです。三吉の闘志を奮い立たせた初代通天閣が建てられたのは101年前。つまり来年で「通天閣は百歳」。

通天閣は明治45年(1912)7月、総合娯楽施設(遊園地)「ルナパーク」のシンボルタワーとして建設されました。高さ74メートル、総工費9万7千円。当時、東洋一の高さを誇る通天閣の展望台からの眺めは大いに人気を博しました。ルナパークが開園した新世界は、かつて明治36年には第五回内国勸業博覧会が開かれた場所でした。やがて勸業博跡地4万坪は大阪土地会社に払い下げられ、「新世界」へとなくなっていきました。「新世界」には、ニューヨークのコニーアイランドをモデルにした遊園地「ルナパーク」とパリのエッフェル塔をモデルにした「通天閣」が建設されました。ちなみに「通天閣」という名は、漢学者藤沢南岳<sup>なんがく</sup>が命名したともいわれています。ルナパークには娯



月夜の新世界？ 昼間撮影した写真を加工した珍しい絵はがき

楽施設が建ち並び、まさに「新世界」。中でも照明で七色に輝く噴水が流れるホワイトタワー、そこから通天閣を結んで設置された4人乗りの赤いロープウェイは新世界名物として広く紹介されました。

当初人気があったルナパークも次第に経営が悪化し、大正12年には破綻<sup>はたん</sup>してしまいます。それまで広告をとらなかつた通天閣も側面に「ライオン歯磨<sup>はみがき</sup>」の文字が躍ることと

なります。しかし大阪のシンボルタワーではあり続け、江戸川乱歩の明智小五郎シリーズ「黒蜥蜴」では、緑川夫人扮する黒蜥蜴との「エジプトの星」の引き渡し場所に通天閣が設定されています。「T公園（註、天王寺公園）といえば、その地域の広さ、日々吞吐する群集のおびただしさでは、大阪随一の大遊樂境であった。（中略）そのまん中に、パリのエッフェル塔を模した通天閣の鉄骨が、大大阪を見おろして、雲にそびえているのだ。（中略）エレベーターの上昇とともに、大阪の街がグングン下の方へ沈んで行く。冬の太陽はもう地平線に近く、屋根という屋根の片側は黒い影になって、美しい碁盤模様をえがいていた。」

昭和18年(1943)、通天閣の下映画館大橋座で火災が発生、通天閣にも燃え広がり脚部が曲がってしまいます。巨大な廃材と化した通天閣は金属供出を目的として解体されてしまいました。ちなみに一説には明石海岸に放置されていたともいわれています。ここに初代通天閣は姿を消します。

時は流れて昭和31年、通天閣復活の動きがおこり、総工費3億4千万円をもって二代目通天閣が再建されました。高さ103メートル、設計者は後に東京タワーや名古屋テレビ塔を手がけた内藤多仲。世界最初の円型エレベーターを取り入れたものでした。来年百歳を迎える通天閣、人々に愛された「浪花の高塔」。阪田三吉が眺めた通天閣の灯は、今もかわらず大阪の人々に夢と希望を照らし続けているのです。

### ● 編 纂 所 日 報 ●

**8月3日（水）** 大阪教育大学附属平野中学校の生徒さん6名が大阪市立中央図書館と大阪市史編纂所を見学に来られました。編纂所では、仕事の内容や大阪の歴史について説明を受けたあと、引率の小村典史先生のご紹介により現在編纂所で整理している古文書を見学しました。



**8月27日（土）** 大阪市立中央図書館で「大阪発、災害を考え一歴史から・現場から」が開催されました。市史編纂所長の堀田が、幕末の安政大地震(1854年)や明治～昭和期に大阪を襲った災害の歴史を紹介したあと、東日本大震災で実際にレスキュー活動にあたられた大阪市消防局・自衛隊・海上保安庁のみなさんが現地の様子を報告しました。

「この巻物は将来教科書に載るかな？」

### ● 新刊・近刊のご案内 ●

#### 『大阪市史史料』第76輯「大坂御陣覚書」

『大坂御陣覚書』は、延宝5年(1677)に成立した大坂冬・夏両陣の軍記です。執筆者は、紀州藩軍学者の宇佐美定祐。宇佐美は藩主の援助をえて、実際の合戦参加者から多くの体験談を集めることができたため、大坂の陣に関する軍記のなかでも最も臨場感のあるものと評価されています。9月に刊行し、頒布を行っています。

#### 『新修大阪市史』史料編「近世Ⅱ 政治2」

今年度は史料編第7巻の「近世Ⅱ 政治2」（第8回配本）を刊行いたします。江戸時代に大坂の行政を担った大坂町奉行の職務や仕事ぶり、町奉行所の与力や同心に関する各種の史料をあつめています。冬頃刊行予定です。

#### 刊行物販売先

旭屋書店（大阪本店・天王寺Mio店）、大阪歴史博物館、ジュンク堂書店（大阪本店・千日前店・難波店）、ユーゴー書店、大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館3階）ほかで頒布しています。詳しくは大阪市史料調査会（06-6539-3333）までお問い合わせ下さい。

## 絵はがきでみる昔の大阪（15）

### 大江橋（大正期）

大江橋は堂島川に架かる橋で、江戸時代の元禄年間に架けられました。天満橋・天神橋・難波橋の浪花三大橋に次ぐ規模の橋で、103.7mありました。何回か架け替えられていますが、明治時代の橋は85.6mの木製の橋でした。明治18年（1885）の淀川大洪水のときに、ほかの橋と同様に流失してしまいました。

木製の橋では流されるということから、鉄橋が作られることになり、天満橋・天神橋などと一緒に、大江橋も鉄脚木桁の橋になりました。それまで大江橋と淀屋橋はまっすぐに結ばれていなかったのですが、この時に直線で結ばれることになりました。ところが、明治42年（1909）の「北の大火」でこの鉄脚木桁の大江橋は焼け落ちてしまいました。その後、仮橋が架けられました。

大江橋の再建にあたっては、その当時大阪市で市電網の整備が始められたころで、大江橋にも市電を走らせることになり、それに耐えられる構造の橋が建設されました。橋の完成は明治43年8月のことです。写真の橋がこの時の橋です。この写真は堂島の方から南西を望んだもので、日本銀行が見えます。橋の上を市電が走っていますが、明治43年12月に開通した市電第二期線の南北線です。橋の長さは84.4mです。

この後、大正期になって大阪市第一次都市計画事業により、御堂筋の建設が始まりますが、この時に大江橋は淀屋橋とともに新たに改築されることになり、一般から設計が募集されたのち、鉄骨鉄筋コンクリート製の優美な橋へと変身し、現在に至ります。ちなみに現在は81.5mの長さになっています。改築されるたびに橋の長さが短くなっているようです。なお、現在の橋は、大阪市の指定文化財になっています。

（堀田 暁生）



▼大阪市史編纂所では、所の仕事の紹介や、刊行物の案内などのため、ホームページを開設しています。こちらをご覧ください。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/>